

2013年2月13日(水)

(第三種郵便物認可)

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授

久々に能登は輪島に行ってきた。行政上は石川県だが、日本海に突出した能登半島は古来それ自身がおおきな日本海を渡る人びとのランドマークであった。その先端付近にある輪島はその中核都市として賑わった。輪島塗などの伝統工芸もあるし、半島の各地には



祭事などの歴史もずいぶん古い。とにかく能登地方は、縄文時代の遺跡も多数知られるなど、歴史の長さは一級である。それなのにいまは過疎が進み、輪島の町も往時の繁栄は影を潜め、半島全体が一地域としての自立性を失いつつある。「本土」に

伊豆半島と能登半島

出るにも、むかしは鉄道が通っていたが、今は金沢駅からのバスによる以外、公共交通はない。能登空港があるとはいうが、東京からの便があるだけで、他地域からのアクセスはない。そのバスも、観光シーズン以外は閑古鳥が鳴き、私が乗ったバスもほとんどが空席だった。

対照と類似、交流の可能性

事情は伊豆半島にも通じる。太平洋に突き出していて、その先端は幹線たる東海道からは距離がある。半島全体としては過疎化が進み、東京に近いとはいえ、産業もふるわない。新幹線にアクセスするだけでも大変である。能登と伊豆とはおどろくほど似ている。まず、どちらも大きな半

島である。中部地方の地図をくると180度回転させると伊豆半島の位置に能登半島が来て能登半島の位置に伊豆半島が来る。鉄道も必ずしも便利とは言えない。県都である金沢市あるいは静岡市からはいそいそと遠い。山がちで、目立った製造業はない、などだ。

むろん伊豆半島と能登半島とはいろいろな意味で対照的である。まずいまの時期は天候がまったく違う。かたや紺碧の空から陽の光が注ぐかと思えば、かたや鉛色の空からは雪が落ちてくる。かたや桜や菜の花が咲き誇るかと思えば、かたや雪に覆われた大地に生命の息吹は感じられない。とれる

魚の種類も、その旬もまったく違う。それに何より、能登と伊豆とは縁遠い。相互に訪ねるにはいかなる手段をもってしても優に1日の時間を要する。この、互いに縁遠く、また一面対照的でもあり他方きわめて類似する特徴をもつ能登と伊豆とが交流してみたらどうだろう。伊豆―能登半島サミットをするのだ。自分になく相手にあるものは何か、反対に自分にとって相手にないものは何か。地域おこしのため、自分が相手の立場におれば何をやるだろう。

こうした学び合いは、双方にとって有益である。三つこの交流は、地域主体がいい。とまたか、伊豆―能登サミットを計画してくれないだろうか。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。